

認定心理士の会から

認定心理士の会 イベント参加のススメ

今年も私の勤める大学では、認定心理士の一括申請の時期になりました。年にもよりますが、30～40名の卒業予定者が申請をしています。

認定心理士運営委員会のお仕事をお引き受けしてからは、認定心理士の会のお話も学生にしています。今後の人生のさまざまなステージにおいて、学びなおしの機会や改めて心理学に触れたくなったときに、認定心理士の会のイベントの存在はちょうどいいポジションにあるなあと思うからです。

全国の認定心理士の会の支部で企画されるイベントの内容は、幅の広い心理学という学問ならではで、大変バラエティに富んでいます。各支部の運営委員の先生方の努力を感じるところです。努力とは申しましたが、私などは、普段接点の少ない他分野の先生方と関わりを持てる機会として、楽しみを感じることが多いところもあります。

皆さん、イベントにご参加の際には、ぜひ隣の人に話しかけてみてください。イベントにはさまざまな年齢・職種など、多種多様な方々がご参加になりますが、その日そのイベントに参加しようと思った、という同じ「動機づけ」を共有しているという共通点があります。イベントで参加者の方同士の交流を見る能够のもの、このお仕事の喜びの一つとなっています。

私の運営委員の任期も（おそらく）後半戦となりました。皆さまのいろいろな心理学との、そして参加者の皆さん同士の新しい出会いに少しでも貢献できるよう、魅力的なイベントの企画などができるればと思います。会員の皆さん同士はもちろんのこと、会員であることにこだわらず周りの方にお声かけいただき、認定心理士の会のイベントに奮ってご参加ください。

（認定心理士の会運営委員会委員 森本文人）

若手の会から

若手心理学研究者としてAIとどう付き合うか

2025年度の若手の会企画シンポジウムでは、“AI for 心理学”と“心理学 for AI”という2つの姉妹企画が連続開催されました。両シンポジウムは共通項を持つつも相互補完的な内容になっており、半数程度の方々が続けて参加されていました。

前者は“AI for Science”的視点から研究している先生方、ならびに心理学者の先生方から話題提供いただきました。特にAI技術の利用可能性と限界について議論され、フロアからは、AI技術を有効活用したい気持ちと、「どこまで信用していいのか」といった、不確実なまま研究利用することへの不安が広く共有されました。

そして後者では、企業に所属する先生方と研究機関に所属する先生方のそれから、心理学研究におけるAI技術の利用と社会実装の取り組みについて、実践例と課題を話題提供していただきました。特に倫理的課題について議論され、研究者側と利用者側それぞれにおける利益と課題のトレードオフに関心が集まっていました。

全体を通して、AIに対して感じる不透明性から、研究活動に取り入れることへの不安や、自身のAIに関する専門性の限界をどのように解消するか、といった点に关心が集まっていたように思います。特に若手研究者としては、そうした分野に明るい研究者との共同研究を計画することや、企業との産学連携を目指すことが一つの選択肢として提示されたように思います。その一方で、若手研究者が異分野の専門家とつながる機会や、共同研究を推進するための予算獲得が困難であることが課題として挙げられていました。

今回のシンポジウムでも紹介された「心理学若手コンソーシアム」のような場を普及していくことが、この課題を克服する第一歩になることを期待しています。

（若手の会幹事 町田規憲）